

『虫の文化史』追補

笹川 満 廣

MITSUHIRO SASAKAWA

Supplemental notes for “Cultural entomology”

要旨：さきに刊行した『虫の文化史』に補足すべき知見，すなわちカイコの眠期呼称についての伝説，人体寄生虫シラミの分類学的検討などの文献を引用，解説した。

はじめに

われわれの衣食住をはじめとして，文学・芸術・歴史・宗教・伝説・民族学あるいはレクリエーションにいろいろな昆虫がこれまで深くかかわってきた足跡を振り返るとき，昆虫ほどヒューマニティーの助長に貢献してきた動物はほかに見当たらないといっても過言でない。HOGUE (1980) は，“文化昆虫学 (cultural entomology)” の重要性についてあらためて提言しているほどである。

筆者はさきに『虫の文化史』(1979)を公にしたが，その後2，3の知見を得たので，ここに補足するとともに若干の考察を試みたい。

本文を草するにあたって，九州大学江崎文庫の閲覧に便を図っていただいた同大学農学部平嶋義宏教授及び森本 桂助教授，『蚕狼御由来記』の判読をご叱正いただいた本学文学部藤井 学教授に対して厚くお礼を申し上げる。

1. カイコの眠期の呼称

カイコは幼虫期に4回脱皮をする。その最初の脱皮時(眠中)を獅子休み，2回目を鷹休み，次いで船休み，庭休みと古来呼称されてきたことは，有名な養蚕古書である野本道玄著『蠶飼養法記』(1702)，塚田与右衛門著『新撰養蠶秘書』(1757)及び上垣守国著『養蠶秘録』(1803)に見られるところである。しかし，それらの呼称の由来については浅学の身のこととて明らかにできなかった。ただし，上述の上垣の著書，上の

本文24ページには，「或書に云」として「天竺霖異大王の事」が引用されていて，簡単にその由来が述べられている。

江崎文庫に所蔵されている諸隅貞康著の官許『蚕狼御由来記』全には，霖夷大王についての伝説が詳述されている。本書は美濃判，本文12丁の版本で，「扶桑蠶来御縁記」の見出しで始まっているが，残念なことに出版年月については不詳である。国立国会図書館白井文庫にも一部所蔵されているが，稀本のようなからここに眠期呼称の由来にあたる部分を抜粋して紹介することにしたい(句読点及び波線は筆者挿入)。

「欽明天皇の御宇に蚕養始めて起る。其由来を急度尋るに天竺國より下りたもふと云なり。西域記に日，羅什三蔵と云僧震旦より天竺に渡り給て道法其外所々を記したまふといへ共爰に略す。(中略) 舊仲國と云國の主なりし元祖轉王と申奉るなり。夫より田□れ真夷王，轉輪王と王法相續きて霖夷大王也」

この霖夷大王の御殿は言葉にも尽くせないほどのけんらん豪華なものであったという。

「御妃に光契夫人と申奉る。御姫君にハ金色蚕姫と申て，我朝え蚕御始め給也。或時光契夫人と申奉御妃，悩ませ玉ふ事次第に重らせ玉ふて，普天卒土の神祇を行ひ玉ひ，醫療を盡といへども自業自得の病ひなれば，終に空しくならせたまふ。(中略) 霖夷大王にハ妃渡らせおハしまさでハとて，昆舍離國の王より大液夫人と申御姫君を妃に御むかへ參らせける。大王にも古しへの皇后の如くにハ思召さず，あからさま也。姫君も継母の事なれば尤歎きぞ増りけり。かかる處に彼妃，



この人になりて邪見放逸の人也。とりわけ姫宮を憎み
たもふてい路いろ^{ざんげん}言^{あきまやく}し、悪逆日々に増長して、或時
妃の巧ミにて獅子吼山と云山あり。彼山深山にしてそ
こばくの年月を経るといへ共、人乃通ふべき事なし。
栖^{すむけ}獸にハ獅子在と云けだもの計り多かりき。一切の畜
類を取喰ふ故に鳥獸虫の類一ツもなし。人倫の影をさ
すといふ事なく、かかる恐しき山え姫宮を流し失ふべ
しと仰られ、彼官人共主命是非もなしとハ云ながら捨
られける。(中略) 去バ姫宮ハ彼山に一人おハして涙
とともに月日を送りたもふ。其山に獅子多くすむとい
へ共姫宮をあやまり申すもなく、却て禮拜し奉る。衣
食物を求めて参らせける。かかる程に星霜を送らせたまふ。或時彼山の獅子、姫宮の前に来てひざまづき、
頭をうなたれて禮し、其後己レが脊を向けてうづくま
る。姫宮ハいづくへ行バとておしからぬ命にもあれバ
こそと思ひたもふて、獅子に打乗り玉へバ、余所へハ
行すして、天子渡らせ玉ふ紫宸殿の床に下し奉りて、
獅子ハ其儘帰りぬ」

「又或時彼妃の所行にて姫宮を弥にくミ玉ひて、此
度ハ内裏より遙程遠き山あり。是も国の傍也。鷹^{ようぐんざん}群山
と云山なり。又官人に課せて流さるる。彼山高く、嶮
岨の山なり。春夏秋をしらず□□山なり。鷲鷯の多か
りきゆへに鷹群山とハたかむらがる山と人云也。この
山にも月日をおくり、木の根を枕に苔^{しとね}を衽として露霜
雪を襖とし、明し暮したまふ。是も鷹共参りて食支を
与へ奉る。かかる處に帝より鷹をうたせに多くの兵を
遣ハさる。渠等山へ分入り、数の谷峯を登る。然るに
至れば、ある木の本に容顔美麗のやさしき姫宮渡らせ
たまふ。能々見奉れハ我主君の姫宮也」

姫宮は継母の仕業によってこの山に流されていたと

言われたので、兵たちは鷹狩りをやめて、姫宮を都へ
連れ帰り、早速帝に奏聞したところ、帝は別に宮を造
って遇されることとなった。しかし、

「妃猶惜き事に思ひ、其後ハ遠き嶋へ放さ早。彼嶋
ハ海岸山^{かいがん}とて、地より拔群隔て程遠き嶋也。船路三
日計り也。此嶋にハ木竹苔の類なく、かしけたる巖の
みある。斯る所に月日を送らせ玉ひて、久しく住たま
ふ。或時釣の小舟、風に吹放されて、嶋の邊え舟より
上り、此姫宮を見奉りて御痛しく思ひ奉り、我舟に乗
せ参らせて、本国え帰り、内裏に移し奉り、其後ハ公
卿大臣日番を盛んにして守り申されけり」

その後、姫君はつつがなく暮しておられたが、ある
時、他国の東宮の御妃になられるということが起こる。
一方、大王が遊山のため遠国へ行幸されている間に、
四度目の姫君追放事件が起こった。すなわち、

「還幸十日計り、件の妃、御留守を能事ニ思ひたも
ふて、六位と云者を召て宣ふ様、汝を深く頼ぞ。清
涼殿の小庭^{ちよくじやう}え七尺程の穴を掘て得させよとあり。六位
は勅詔を蒙り、庭の内を貳間計に七尺の穴を掘立たり。
彼妃の仰にハ、汝、東宮の金色姫を搦め突埋めると宣
ふ」

六位はやむなく姫君を生け捕って穴に埋め、自分は
墨の袖の身(僧侶)となって入山し、菩提を弔ったと
いう。やがて大王が還御され、姫君のことを尋ねられ
るが、だれひとりとして知るものがいなかった。さら
に東宮御所で尋ねられても、その事情を知るものがい
なかった。大王が清涼殿で嘆き悲しんでおられたとき、

「清涼殿を照するあり。其光り恰も旭の昇るかこと
く也。帝怪しく思召、博士を召て占ハせられたもふ。

1)『養蚕秘録』には海眼山。

博士の日、此地の中にかさま人あり。又、鬼神魔王の居る處か、地より七尺底に化たる者あるへしと占ひ出せば、公卿大臣其外□居たる人々一同にさっと立、彼小庭え踊り出、我も我もと土をつのける事斜ならず。暫時七尺斗堀奉れハ、帝の御寵愛たる金色姫宮渡らせたもふ。急ぎ守護し奉りて、大王の御目かけ奉れハ二度蘇生したもふやと御歎びハ限りなし。姫宮ハ御すがり玉ひて歎びの泪にむせびたまひて、暫し言葉ハなかりけり。帝の仰にハ、是併継母の情なき所為也」

そこで、大王はこれ以上姫君を継母の悲情にあわさないためにはどこか異国へ遣わすのがよからうと考えられ、官人に桑の木で空穂船をつくることを命じられた。

「海邊え大王と姫宮諸共行幸なして、彼空穂船に姫君を作り籠て宣ふ様、汝ハ生れたる時より只人にあらず、いかさま佛神三宝の化身なりと覺たり。此國におゐてうきめに逢んより、いかなる国へもまいられ行て、其国の衆生の助になる事をはじめ玉へとて、御泪ともる共に沖へぞおし出したもふ。姫君御歌を詠したもふ。

ワかれ路や行きさきぎハしら浪のうきに絶なん我身なりける

万民名残を惜みたもふ事限りなし。大王ハ其儘内裡に還御ならせ玉はずして、海の邊、かつうらに續ける原あり。此原、桑の木のミ生ひ茂りたり。此所にかにも浅間しく御殿を造らせたもふて、住せたまふ也。王位をハ物うき事に思召、桑門と成て、姫君の召れ出させたもふ浦を朝夕詠めくらし、思ひ明したもふとなん。夫より、桑原院と人申奉る」

蒼波万里を凌ぎつづけられた姫君の空穂船は幾星霜を経たのち、

「秋津洲の吾妻の果、常陸の国とかや豊浦²⁾の湊へ寄に掛る。其浦に藤塚権太夫といふ浦人あり」

武人の出であるが、事情があつて野に下り、貧しい生活を送っていた権太夫が、

「或時、釣の為に小舟に棹さして海の面へ漕出したもふ。権太夫、彼空穂船を見渡し、すはや浮木の寄にこそと思ひ、薪にせんと浦え曳揚て、打割て見れハ、忝くも金玉を磨きたる如くの姫宮一人おハする。権太夫見奉りて、斧を捨、彼處に倒れ伏て、漸有て、此男の日、いかなる人ぞ。汝只人にあらず。御名を名乗たまへ。もし名乗玉はずハ御命を失ふべし。姫君答て宣ふ様、我ハ化生の者にてもなし、人間なり。舊仲國と云国王の姫也。継母の讒言に依て、山々嶋々へ流され、憂目に逢たもふ。父大王の情によりて桑の木を以、空

穂船に作り籠られ、此蒼波へ沈められ、我國を出しとき、父大王の仰に扶桑の国えゆられ傍て、万民の助けに成事をやせんとの言也。取上げて得させよ。我、涯分報養せん。又、邪見の国ならば、急ぎ殺せと仰られける。(中略) 何ハ兎もあれ、我家迄肩に脊負、或ハ御手を引、住家迄御連帰りけると也。(中略) 何ハともあれ、先此方へといつきかしつき奉り、此権太夫は元来子もなきものなれハ、かざしの花、掌の玉の如くせん也。此姫君、俄に異例の心地おハしましけり。年月海の面にうき沈ミたまふ御身をいたましめ玉ひけん。風の心地、弥重らせたまふ程に、太夫夫婦ハ前後に附添奉り、如何ハせんと歎きけり。傾て姫君の仰にハ、我國に在し時、継母の所為にて山々嶋々へ流し失ハれつるに、不思議の命助り、是迄来て死す事ハ前世の定れる事ならん。我、若年の時、辛苦せし故に此病ひを受つる也。自らはかなくなりなば、能々後の世を頼む也。あら名残おしの太夫夫婦、恋しきハ父大王やと、是を最期のことワぎに北邙の露と消玉ふ。(中略) 夫婦歎きの餘りに清き棺槨を拵へ、空しく成たもふ姫宮を入奉り、傍に置、圍繞渴仰し奉る。夫婦或夜の夢に、我に食を与へよ。さらハ自国にて所々え流し捨られし書を受けて学ふべし。汝が病に恩を報ずる言成へし。又、夢想を蒙り、夜も明ぬれば、急ぎ棺槨の蓋を開きみれハ、有し姫君の體ハ水と消て骨肉もなく、如虫と成て有けれハ、夫婦見奉りて再び出生したまふとて、御歎は限りなし。去レ共、食物を参らせんにも穀の類是を食せず、虫の事なれハ何を以養ふべし、子細をしらず。太夫いかんと案しけれハ、此姫君吳国の人にてましませば、巨細をしらず。去ながら姫宮の御国にも桑の木あれバこそ、彼舟をも造りつると覺へたり。国の木なれハ其由縁もあり、食されもやせんとして、彼虫等の中え与へたまへバ飲んで桑の葉に取付、食したまふ也。去レハ、古郷の木にてあれバ、恋しく思し召るゝぞやと桑を参らせけれハ、次第に成長したまふ也。殊に寄特ある此虫たち桑をも参らず、動きもせず、皆々頭を一様に上げて、華々したる躰也。夫婦も是ハ如何あるやらんと云に、其夜の夢に告て曰、相構て騒く言なかれ。我國にて獅子吼山、鷹群山、海岸山え流されし苦しみの堪難さに命休に悩む也。ケ様にする言四度あるへし。我存生の時、一々語りし其所の□を受て悩むへし。其後、空穂船に乗たる迄、我為にすべしとて、夢ハ覺にけり。扱こそ蚕を養ふに、一ツの休ミを獅子の休と名付、二番の休を鷹の休、三番の休を船の休と唱ふ。其後、庭の休也。此四ツの留りハ獅子吼山、鷹群山、海岸山、内裏の庭え埋められたまふを、庭上留り一大言也。只、能々誠心して不浄を忌べし。後、繭

2)『養蚕秘録』には豊良。

を作る事ハ空穂船に乗りしを学はれつる也。其頃、筑波山の凱道仙人、此繭を以、糸綿といふ事になして、万民の空をも防ぎたもふ也。掛巻も時の天子欽明天皇の御后に勅して自ら蚕を養しめたもふ」とある。

金色蚕姫が鎮座ましますと伝えられる常陸国筑波山麓の蚕影山児玉神社に養蚕祈願すれば繁栄は疑いないし、またカイコは勢至菩薩の化身であるからおろそかに取り扱ってはならないと戒めるほか、養蚕の心得などを述べて、本文は終わっている。

このように天竺で四度も受難した霖夷大王の娘、金色姫がカイコに化身して、わが国に現われたという伝説に基づいて、幼虫期における脱皮ごとの眠期についてそれぞれ特有の名称で古来呼びならわしてきたのである。

なお、この伝説は欽明天皇の時代のものであるが、それ以前の195（仲哀天皇4）年に秦の功満王が来朝して、蚕種を献上したのが最初の渡来人による養蚕記録とされている。

2. シ ラ ミ

1) コロモジラミの種的地位

コロモ（キモノ）ジラミ *Pediculus humanus* L. はアタマジラミ *P. capitis* DE GEER の移住型であるといわれる。前種はとくに衣類を、後種は頭髪を探し求める習性がある。

古くは HOWLETT (1917) がアタマジラミを衣服に放飼して人体飼育実験を試み、第2世代の子孫になると頭髪への移住傾向はほとんど消失してしまい、体形はコロモジラミ型に分化したという。ALPATOV と NASTUKOVA (1955) はアタマジラミを容器内で累代飼育を行ったところ、第5または6世代以内で完全にコロモジラミ型に変形してしまったと述べている。一方、同一飼育条件下で6または43世代経過したアタマジラミの体長（コロモジラミより小形）には基本的な変化がみられなかったという報告がある (BUSVINE, 1948; SCHÖLL, 1955)。

これらの相反する観察結果からみて、MAYR (1963) は両シラミにはそれぞれ遺伝的に異なる系統が存在するのではなかろうかと示唆している。しかし、その実証は今のところだれも行っていない。さらに、両シラミを小さい容器内で同時飼育すると、互いに交尾して、両親の中間的体長を示す雑種第1代が生じることもよく知られている。したがって、両シラミを別種として扱うかどうかについては賛否両論で今日まで推移してきたのである。

別種扱いを主張する BUSVINE (1978) は、エチオピ

アのアディス・アババ市での入院患者（アムハラ族、ガラ族などの男女）の頭髪や衣服に同時寄生をしていた標本（アルコール漬け）を入手して調べ、両シラミの体長や中脚脛節長において明瞭な差異がみられることから、コロモジラミは明らかに独立種であることを強調している。すなわち、コロモジラミの平均体長は雄で 3.8 mm, 雌では 4.4 mm であってアタマジラミ（雄は 2.9 mm, 雌は 3.5 mm）よりも大きく、脛節長については両者の雄で 421:291 μ , 雌では 425:296 μ で、明らかにコロモジラミのほうが長いという。しかも中間的な大きさ（長さ）の個体は1匹も見られなかった点を論拠にしている。両計測値についての両種の頻度分布曲線は明らかに分離しているが、何匹かの個体は少数とはいえ互いに相手側の分布圏内に見られる。それについては、単に偶然に混じったものであろうと説明しているにすぎない。論旨の展開上、中間型が1匹も見られなかったことにむしろ力点を置いているようである。

同所性の種個体群は当然、生殖的に隔離されているはずであるから、計測値と従来知見に基づいて両シラミを別種として扱うべきであるとする意見に異論をとる余地はない。しかし、全被寄生（同時）患者のアタマジラミは計約5千匹、コロモジラミは約33千匹であったというのに対して、採集・所検標本はそれぞれ約140, 230匹という少数にすぎなかった点は標本抽出に正鵠を得たものであったろうかと思われる。また、より明瞭な両種の区別点とされる脛節長については、前述の平均値が表記されているけれども、頻度分布図では目盛りが0.2~0.35 mm の範囲内で両種の分離したヒストグラムが描かれている。その図から算定すれば、アタマジラミの平均脛節長は雄で 230 μ , 雌では 233 μ となり、コロモジラミではそれぞれ 315, 310 μ となる。どちらが正しい計測値であるかは不明である。以上のような不備点が補正されて、そして交配実験が試みられたのちに結論が導かれることを強く望むものである。

2) 大西洋上のシラミ・ライン

16世紀に西インド諸島で伝道を行っていたスペイン人の B. DE LAS CASAS は『インディアン歴史』（1875）のなかで、次のように記している。

「西インド諸島への旅で不思議な出来事がひとつあった。それはカナリー諸島の100リーグ（約2,700海里）域か、あるいはアゾレス諸島に接近したとき、それまで多数わいていたシラミがその地点から西インド諸島までの間に死滅しはじめ、最初の島に着いたときにはだれもシラミをわかしていなかった。反対に、カスチ

リャへの帰途では、どの船も船員たちもその境界線に達するまではシラミに侵かされなかったのに、さらに進むにつれて、あたかも待っていたかのようにおびただしい数に膨れあがった」

その境界線（シラミ・ライン）については、同じく伝道師 OVIEDO (1526) がアゾレス諸島の西約100リーグの経線とし、その線から西航の船員たちに寄生していたアタマジラミやコロモジラミは不思議にも死滅してしまつたと、同じような記録を残している。

HOGUE (1981) は、これらの記述は科学的根拠がなく、単なる作り話であると述べている。恐らく船員の伝承に基づいた記録であろうが、出所は明らかでない。シラミは発育適温域を越える高温に対して感受性が強

いといわれるから、熱帯圏へ向かう船員の体温上昇、また彼らの脱衣条件などがシラミ個体数減少の一因になるかもしれないが、この経線の存在は空想にすぎないと思われる。

引用文献

- ALPATOV, V. V. & O. A. NASTUKOVA (1955) *Bull. Moscow Nat. Hist. Res. Soc.* **60**: 79.
 BUSVINE, J. R. (1948) *Parasit.* **39**: 1.
 — (1978) *Syst. Ent.* **3**: 1.
 HOGUE, C. L. (1981) *Ent. News* **92**: 53.
 MAYR, E. (1963) *Animal species and Evolution*.
 Harvard Univ. Press.
 (間接引用文献は略す)

Summary

It used to be said that the moulting periods of silkworm are the rest of lion, hawk, boat and yard, for the first to fourth moults in the larval stage, respectively, by the old sericulturists in Japan. It is origi-

nated from a myth of a young princess, Konjiki-hime's passion history in the Old China. Also, the specific status of human head and body louse, and the Atlantic louse line are discussed.